

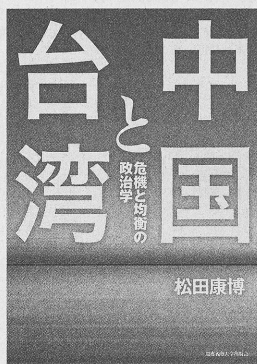


中台問題は、起源は日清戦争後の日本の台湾植民地化であるが、直接には第2次大戦後の内戦に敗れ、台湾に逃れた当時の中央政府・国民党政権が「大陸反抗」を叫び、「統一」を主張する共産党政権に抵抗し続けたことから出発している。著者は台湾研究、安全保障研究に関して国内外で著名な専門家である。本書は2部構成で、「危機と均衡の歴史」、「台湾海峡の未来」と題し、時間軸と空間軸から緻密な実証分析と、理論分析を試みている。

中国当局から見れば、強力な

中国と台湾

松田 康博著



(慶応義塾大学出版会・3960円)

まつだ・やすひろ 65年生まれ。防衛庁(省)防衛研究所主任研究官などを経て、東京大教授。主に中国と台湾の国際政治を専門に研究する。

統一・分断：描く4シナリオ

「アメとムチ」を示しているのだが、台湾は頑なに口を閉ざし(蒋介石時代は別だが)、固い殻の中に閉じこもっていると映るのだろう。しかし台湾側から見れば分断後の約80年間は、自

らが大変貌を遂げ大きく成長した歴史であった。とりわけ李登輝時代(1988〜2000年)は経済、政治、人々の意識はボイント・オブ・ノーリターンと

症が続き、台湾は早期の経済回

る。

すなわち、日本に続くアジア新興工業経済群(NIEs)の一つとして高度経済成長を果たし、政治面では中華民国の領土を台湾に限定し、多党制の導入、

復、危機管理に対する高い評価を受けた。これによって、国際的なプレゼンス、台湾人の自信を高めた。ただ本書でこれに関する言及が少ないのはいささか不思議でもあった。

総統など政治指導者の直接選挙、言論の自由など民主制度の定着を図り、大陸とは異なった独自の意識——台湾アイデンティティーの形成が進んだ。

第8章及び終章において、シナリオ・プランニングという手法を使い、中台関係の未来を武力統一、現状維持、分断の恒久化、米中冷戦の最前線という4つのシナリオで描いている。理論的にもデータの完成度が高く、考え方として参考になる

もう一つの重大な転換は、武漢発の世界的な「コロナ・パン

が、そもそも「科学的」に10年〜20年先の展望が可能なのである。特に中台関係自体の構造的変化、意味の変化、意識の変化などを考慮すべきであると思っのだが。

《評》早稲田大学名誉教授

天児 慧